

モトカレ!!

Contents

モトカレ!! 5

初めての…… 277

モトカレ!!

「メイ」

耳元で囁かれて、思わず首をのけぞらせる。

その声は、カラダの中を駆けめぐり、私の鼓動を速くした。

懐かしい……そう、とても懐かしい声。

耳たぶを舐め上げられて、思わず声が漏れてしまう。自分でも驚くくらいの、甘い声が。

「……メイ」

再び耳元で囁かれた声は、私の腰の辺りを微弱な電気のように突き抜けて。そして耳の形をなぞるように舌を這わされ、甲高い声まであげてしまった。

でも、なんで？

どうして？

何がどうしてこんなことになっているの？

アルコールドぐらぐらしている頭の中は完全にパニック状態で、拒絶の言葉も出ない。もちろん、声の主を突き飛ばすことなんてできるはずもなく。

唇を塞がれ、散々に吸われて、口の中を蹂躪されて……その言いようのない感覚に、抵抗する力
はことごとく奪われる。

だって、あまりにも心地よくて。腰の奥に直接響くような確かな快感に頭を支配されて、何も考
えられないから。

真っ暗な部屋に、私と『誰か』の息遣いと衣擦れの音だけが響いている。

分厚い遮光カーテンに遮られ、月明かりさえも入ってこない。そんな暗闇で目を凝らしながら、
遮光になんてしなれば良かったって、心底思った。

「メイ」

そう囁く人の顔を見たいのに。暗闇の中、しかも酔ってうねる視界の中では、その姿がはっきり
見えなくてもどかしい。

見たいのに、その顔を。確かめたいのに、あなただって。

呼吸も唾液も奪い去ってしまうような激しいキスにぼんやりしていると、脇腹を撫でていた指先
が、ゆっくりと胸にずらされる。

「……!! ひゃっ」

最初から敏感な先端を掠めるように的確に触れられて、腰がびくと跳ね上がる。既にそこはブ
ラの中で硬くなってしまっていて、服の上からでもその様子が簡単に分かるはず。恥ずかしくて頬
がカアツと熱くなった。

何も抵抗なんてしていないのに、片手で両手首を押さえられ、頭の上に縫い付けられている。そ

んな姿勢では身を振ることもできず、与えられる刺激から逃げられない。

触れられる度に腰が跳ね上がって、まるで胸を差し出すようにのけぞってしまい、さらに羞恥心が煽られていく。

「ひゃ、んっ。や、やだ……」

そんなつもりはないのに、唇から漏れる声は自分のものじゃないみたいに甘ったるくて……呼吸は熱く、荒くなる一方。

胸の一番敏感な部分を中心に、『誰か』の指先は、触れるか触れないかの微妙な力加減で撫で上げてくる。その感触はびりびりとカラダ中を駆けめぐって、私は何度も嬌声をあげてしまう。

恥ずかしくてたまらないのに、抵抗できない。

でも……私、この感覚をよく知っている気がする。

「!!」

胸を撫でていた指が離れ、膝に触れた。ひらひらした薄い生地のスカートが足に纏わりついていくけれど、その手はそれをよけながら少しずつ腿を這い上がってくる。

あともう少しで指がスカートの奥にある薄い布に触れようとした時、ハッとして膝を曲げてその侵入を拒んだ。

だって……言うまでもなく薄い布で隠された場所は、恥ずかしいことになっていて。薄い布越しでも、与えられた刺激にどれだけ感じてしまったか、きつとばればれの状態で。

こんな、こんな淫らな私を、知られたくない。

誰かも分からないのに。

『彼』かどうか分からないのに。

「い、いやっ。ねえ……誰、なの？ あなた、誰？」

震える声を喉から押し出す。震えているのは多分、怖いからじゃない。

だどしたら酔っているせい？ それともこの『誰か』が『彼』かもしれないと思っているから？

与えられた刺激に息が上がってる。たったこれだけでも、カラダ中がびりびり痺れるくらい感じさせる、甘い媚薬のような愛撫。

「誰、なの？」

暗さと酔いではつきりしない視界。その中で、吐息がかかるほどそばにいる人物を必死に見極めようとする。すると、拘束されていた手首が解かれ、『誰か』は私のカラダから離れた。

すると聞こえてきた、重々しいため息。くしゃり、というのは、髪をかき上げた音だろうか。

「マジ、かよ」

吐き捨てるような声には、やっぱり聞き覚えがあつて。でも『彼』だとは確信できなくて。だから何も答えられなかった。

「ちっ」

「え？ は？ ぎゃ、ぎゃああ!!」

舌打ちが聞こえたと思つたら、不意に体が宙に浮いて。驚きのあまり、色気のない声が出てしまう。「ぎゃあつてなんだよ、ぎゃあつて。うるさい、暴れるな酔っぱらい。落とすぞ」

……それは、困る。

どうやらお姫様抱っこをされたまま階段を上がっているようで、落とされたら相当痛い目を見る。だから、言われた通りにじっとしていることにした。

それからドアを開ける音がして、急に体が投げ出された。

「んぎゃっ!!」

「さつきから変な悲鳴だな」

呆れたような声。どうやらそこはベッドの上らしくて、どこも痛くはない。そのまま頭まで布団を掛けられた。

「相手が誰かも分かってないやつを抱く気はない。でもまあ、次は誰か分かるような状況で愉しませてもらうよ」

じゃあな、と『誰か』が出ていく気配がする。待つて、と呼び止めたのに、どうしても声が出なかつた。呼び止め、たかつたのに……

待つてよ、待つて……

……

……

瞼を通して分かる強い日差しに、メイは苦しげに「うう」と呻いた。

喉はカラカラ。頭は割れそうなほどにガンガン痛む。ゆっくり瞼を開けば、眩しい日差しが一瞬

メイの視界を真っ白に塗り潰す。メイはもう一度呻いた。

ぼんやりと見上げた天井は、どうやら自分の部屋ではない。けれど、見覚えのある天井。じっと見つめ、今いるのがどこだか理解した。

「えー？　なんで？　ここ、お父さんの部屋じゃない」

どうやら今は一緒に住んでいない父親の部屋らしい。メイの部屋はこの向かい側のはず。

「あちゃあ。酔っぱらって間違っちゃったのかなあ」
昨夜の記憶をたどろうとするものの、メイには何があつたのかうまく思い出せない。どうやってここまで帰ってきたのかも、さっぱりだ。

昨日の結婚式に着て行ったパーティードレスのままということから考えると、二次会後、どうにか家に帰ったものの、部屋を間違えて眠りこんだ、というところだろう。

とにかく思い出せない以上、自分をそう納得させるしかなさそうだ。
けれど、ひとつだけはつきり思い出せることがある。

メイはスカートの裾を握りしめ、腰をもじもじさせた。言葉にならないざわつきが、腰の奥の方で燻っていて。

それはあまりにも生々しい夢。『誰か』にカラダを好きにされながらも、怖いどころか恥ずかしいほど感じてしまつて。

『彼』かもしれないと思つた。顔が見たいのに見えなかつた。そんな夢。思い出すだけで、カラダの芯が熱くなつてくる。

どうしてあんな夢を見てしまったんだろうと、メイは思いをめぐらせた。そして、そう、ちょうど十二時間ほど前まで記憶は遡る――

な、なんであいつがいるのよっ!!

谷村^{たにむら}メイは小さなバッグで顔を隠しながら、柱の後ろに身を潜めた。せつかく綺麗に着飾っているのに、柱の陰から『あいつ』を窺^{うかが}っている姿は、残念なことに不審人物そのもの。

しかし、『あいつ』がここにしていることは何も不思議ではない。なぜなら、本日の主役である新郎と新婦は、メイと『あいつ』の共通の友人なのだ。

くうっ、もっとよく考えるべきだったわ。ご祝儀を渡した後じゃなかったら、帰ってたのに!!

半ば本気でそんなことを考えながら、メイは顔を隠したままこそそ会場に入り、小さくなつて自分の席に腰掛ける。そしてすぐに渡された披露宴のパンフレットを広げ、席次表に目を走らせた。

探す名前は、ただ一つ。

『橘^{たちばな}権理^{かみり}』。

その名前は拍子抜けするくらいにあっさりと見つけられた。

メイのいる新婦友人席から最も遠い位置にある新郎友人席。そこに『あいつ』こと橘^{たちばな}権理^{かみり}の名前はあつる。

振り返って、まだ空のままの彼の席を確認する。紙面上の距離よりもはるかに遠い実際の距離にとりあえずメイはほっと息をついた。すぐに顔を合わせてしまうようなハブニングはなさそうだ。

「かいり……」

メイは意識せず、小さく呟^{つぶや}いていた。三年間、忘れようとして、でも忘れられなかった名前を。

呟いた途端、頬に熱が集まってくる。それから、カラダの奥の方……女の部分も。ふうとため息を漏らす、それが思っていた以上に甘つたるきを含んでいることに気づき、メイは両手で顔を覆った。

そして、権理と初めて会った日のことを思い出していた。

そう、権理との出会いは、今日と同じように友人の結婚式だった。

すらりとした長身、柔らかそうな癖っ毛に、眼鏡の奥の涼しげな瞳。すつと通った鼻筋。薄い唇。一見すると冷たそうな彼。今でもそんな最初の印象をよく覚えている。なぜなら権理の外見は、メイの好みの『ど真ん中』だったから。

結婚式の後の二次会で初めて言葉を交わして、後日二人だけで会う約束をした。それから一カ月もたないうちに、自然と付き合い始めていて。それは、あまり男性に免疫^{めんえき}がなく、恋愛偏差値の低かったメイにとっては、自分でも驚くような出来事だった。

そして、権理によって刻みつけられてしまったのだ。とんでもない快楽を……

カラダに刻みつけられた様々な快感。それが急にはつきりと思い出されて、メイはぶるりと震える。三年も経ったというのに、カラダ中に生々しく残る感触。

どこもかしこも優しく、荒々しく撫でまわし、しまいには奥の方まで侵入してくる長い指。きつく吸いつく唇に、這いまわる熱い舌。そして、メイを深く満たす権理自身。頭が真っ白になるくら

いの快感に、意識もカラダも焼き尽くされた。

腰の辺りがずくんと疼いて、メイはぎゅっと目を閉じた。

三年も経ったのに、忘れたと思っていたのに、今でもこんなにはつきり思い出せる自分に愕然とする。思い出しただけなのに、メイのカラダの芯はじりじりと焦がされてくるようで。

そう、権理とメイのカラダの相性はとんでもなく良かった。実は権理と付き合うまで『男』を知らなかったメイでさえ、これ以上に相性のいい人なんていないんじゃないかと、本気でそう思うってしまうくらいに。だから会えばいつも自然とそういうことになって。

短大を卒業して社会人になっていたメイと、メイよりも二つ年上だけどまだ学生でバイトに明け暮れていた権理が会うのは、いつも夜の短い時間。話をする時間も惜しんで、互いを貪り合っていた日々。

確かに権理は休日もバイトをしていたし、メイも就職したばかりで忙しかった。だから二人で出かけたりの時間もあまりなかったのは事実。それでも、時間なんて作ろうと思えば作れたはず。なのに、会うのはいつも権理かメイの部屋。気がつけばいつも服を脱がされ、散々に喘がされてしまっていた。

いつしかメイはそんな日々に不安を覚えるようになった。

もしかしたら自分は『それだけ』の女なんじゃないかと。

だんだんエスカレートしていく行為。一緒にいても、服を着ていない時間の方がはるかに長い。怖いと思ってしまうほどの強烈な、快感。

恋愛経験が乏しかったメイにとって、権理の執拗なまでの欲求は、不安な気持ちを抱かせるのに十分なものだった。

それでメイは、そんな自分の状況を高校時代からの友人に相談した。

その友人とは、メイが権理と出会うきっかけとなった結婚式の新婦。彼女は「一度離れてみて、お互いの気持ちを確認したらいいじゃない」というアドバイスをメイにくれた。一度離れて、それでダメになるようなら、きつとカラダだけの関係だと。

乱暴な提案ではあったけれど、メイはどうしても確かめたかった。権理の気持ちを。自分の立場を。だから考え抜いた末、自分から一週間ほど連絡を絶ってみることにしたのだ。

権理の誘いを仕事が忙しいと断り続け、そして一週間後。内緒で訪れた権理の部屋で、メイは信じられない光景を目にした。

そこにいたのは、仄暗い部屋で裸のまま抱き合う、権理と見知らぬ女性。

頭が真っ白になってしまい、喚き散らすようなこともできず、その場から逃げるように立ち去った。それからのことは、ほとんど覚えていない。どうやって家に帰ったのかも分からない。

完全に冷静さを失っていた。権理にはもう会いたくなくて、一人暮らしの部屋に戻ることもなくまっすぐに実家に帰り、次の日には携帯の番号も変えた。一人暮らしをしていたアパートも、数日以内に引き払った。

そうやってメイが完全に連絡を絶ったことで、権理とメイの関係は終わったのだった。

そんな昔のことを思い出しながら、少しだけしんみりとしてしまう。実家に帰ったのも携帯の番号を変えたのも、權理の口から真実を聞くのが怖かったからじゃないか。

そう、メイにとって本当に怖かったのは、もし權理から連絡がなかったら……ということ。初めて会った時の權理の印象はとても華やかで。大勢の女性の中心にいるような人だった。

付き合い始めてからは、二人きりのことが多かったから気にならなかったものの、權理は相当もてるに違いない。

スマートな物腰、知的な瞳。少しだけ意地悪そうに微笑む様子も、相手を飽きさせない話題の豊富さも、どれもこれも女性の視線を集める。權理はメイ一人にこだわる必要がないくらい、女性に不自由なんてしないはず。

信じたくはないけれど、実は自分は大勢いる女の中の一人で、言い訳さえしてもらえない存在かもしれない。それを突きつけられるのが、一番怖かった。愛なんてない、カラダだけの繋がりだと知るの。自分が、大勢の中のどうでもいい一人だと知るの。

だから、自分から全ての連絡を絶った。そうすれば、權理の連絡を待つなんてこともしなくて済むから。真実を曖昧にしてしまえるから。

あれから三年。メイももう二十四歳。二つ年上の權理は、二十六歳になったはず。三年という月日が流れて、もう忘れたと、忘れられたんだと思っていたのに。こんな形で再会するなんて思いもしなかった。

この三年、何人かの男性と付き合ってみた。でも、誰とも長くは続かなくて。最大の理由は、カラダが合わない、ということ。

權理に刻みつけられた快楽は、呪いのようにメイから男を遠ざけてしまった。それでも、忘れられたと信じていたのだ。今日、この場所で彼の姿を見つけてしまうまでは。

「メイ!!」

「つぎや!!」

急に後ろから抱きつかれ、メイは思わず踏まれた蛙みたいな声を出してしまった。首と胸元に絡まる細い腕を掴んで、不満げに後ろを振り返る。

「もうっ、絹ちゃんったら、びっくりしたじゃないっ」

「だってメイ、一人で百面相してるからおかしくって」

大島絹はそう言いながらケタケタと笑った。オリエンタル風の華やかな顔立ち。その華やかな雰囲気には負けないほど、その装いも華やかで。

背中の大きく開いた、体のラインに沿ったワインレッドのドレス。無駄な肉の付いていない、均整のとれたスレンダーな体型の絹によく似合っていて、会場中の人たちが思わず振り返るくらいだ。「受付のところで待ち合わせって言ってたのに、メイったらいないんだもの。探しちゃったわ」

「あ……ごめんさい」

少しだけ膨れっ面だったものの、メイを見つめる彼女の目は限りなく優しい。慈愛のこもった、

なんて言葉がびったりなくらい。

絹はそんな愛情たつぷりの瞳を細め、申し訳なきような表情のメイの頭を撫でる。

「いいのよ。そんなことで怒ったりしないわ。それより何かあった？ さっきから随分と寂しそうな顔、してたみたいだけど」

「寂しそうな顔？ 私、そんな顔してた？」

「してたわよ」

絹が心配そうに顔を覗き込んで、メイはつい視線を逸らしてしまう。

絹とは高校の時から付き合いだ。けれど、絹は権理とのことを知らない。というか知らせてなかった、という方が正解。

絹のメイに対する湖愛ぶりというか、過保護ぶりといったら、そんなじよそこらの変態さんも尻尾を巻くほどで。

高校生だった絹が、「メイの純潔はアタシが守るわ!!」なんて宣言をして、メイに下、心満載で近寄ってくる男たちを、その空手の実力で次々と再起不能にし、メイが家の外に出るとなれば、雨の日も風の日も、さらには風邪をこじらせ肺炎になりかかった日でも彼女について回り、とうとう高校時代、三年連続で皆勤賞をとったという武勇伝(?)まで残ってるくらいだ。

別々の大学に進んでからは、そう頻繁にそばにはいられなくなったものの、その頃には「谷村メイに近づくと闇討ちに遭う」だなんて、ほぼ事実の噂話が広がってしまっていた。

そんな絹の活躍のおかげで、メイの恋愛経験は極端に乏しかったというわけだった。

就職してまで噂がつきまとうことはなかったが、恋愛偏差値の低いままだったメイは、なかなか男の人と付き合うところまでいくことができません……

そうしているうちに権理に出会ったのだ。見た目はメイのドストライクだった権理。そんな権理に口説かれて、嬉しいと思つた。男性に口説かれてそんなふうを感じるのは初めてで。けれど、メイが初めてそんな気持ちを抱いた相手に、絹がどんな反応を示すか見当もつかなくて。もし絹が権理に対して暴走でもしたら……彼は去ってしまうかもしれない。そう思うとメイは怖かった。だから絹に知られてはいけないと思つた。

そんな理由で、付き合っている間は絹に権理のことを内緒にしていたのに、権理との連絡を絶つた後、悲しみのあまりメイは絹に泣きついてしまったのだ。

予想はある程度ついていたものの、絹は激昂して「今すぐ殺してやる!!」「捻り潰して使い物にならなくしてやる!!」と喚き散らした。

権理のことは確かに悲しくて仕方なかった。けれど、絹の激昂ぶりといったら本当に手に負えるものではなく、メイの方が逆に絹をなだめなくてはならなかった。

寝ても覚めても「で、相手の男は誰？」と優しい口調で、でも目は完全に据わった状態で問い掛けてくる絹をごまかすのは相当骨が折れて。

口を割らないメイに痺れを切らし、探偵まで雇おうとした絹。

「もう思い出したくないの。だから絹ちゃんも忘れて!!」

「絹ちゃんが忘れてくれないと、私も忘れられないから!!」

と、必死に訴えかけてやっと、絹は相手の男を探し出して闇に葬ろうなんて、危険な考えを捨ててくれたのだ。

今ならば笑い話にもなりそうなものの、その時は本当に必死で、けれど、そんなふうには必死に絹を止めていたおかげで、メイも長く悲しみを引きずらずに済んだのかもしれない。

それはさておき、こういった経緯を考えれば、今日この会場に権理がいるなんてこと、絹に絶対知られるわけにはいかない。もしもメイを泣かせた男がこの会場にいると知ったら……そう考えるだけで、メイの全身からは血の気が引いて冷や汗が噴き出す。

ああ、きつと、きつと流血沙汰になるんだわ。
こうしてメイにとつての長すぎる一日が、幕を開けたのだった。

披露宴の時間も迫り、ざわめく会場の席がどんどん埋まっていくな。絹が携帯の時計を確認し、「もうすぐ始まるわね」なんて呟く。メイは落ち着かない気持ちで大きく息をついた。

さつきから振り返りたい衝動を必死に抑えているのだ。権理のいるはずの席は、振り返らないと見えない位置。振り返りたくて、でも振り返る度胸もなく。そんな気持ちをごまかすようにさつきからきつと絹とおしゃべりに花を咲かせて。けれど。

何となく落ち着かない気持ちで、メイは立ち上がる。

「絹ちゃん、ちよつと化粧室に行ってくるね」

「あら、もうすぐ披露宴も始まるし、早く戻ってくるのよ」

「うん」

メイはバッグを掴んで小走りに化粧室に飛び込んだ。本当は顔でも洗いたい気分だったけれど、そうもいかず、冷たい水で手を洗う。それだけでも少し落ち着いたような気がする。

そして、バッグの中から口紅を取り出すと、それをゆつくりと唇に載せた。前髪をさつと直し、鏡に映る自分を見る。

どうしたいんだろう、私。権理に会いたくないのかな、それとも会いたいのかな。もう、よく分からない。

鏡に映る自分は、ひどく戸惑った表情をしていて。本当は三年前のことが今でも心に引っかかっているのに、それでもあの時の真実を聞かされるのは怖い。

それよりも……あんな過去のこと、実は権理は少しも気にしていないとしたら、単にカラダだけの女がいなくなっただけと考えていたら——それが一番怖かった。

だから気にかかっているけど、声をかけることなんて到底できさそうもない。振り返る度胸もないのに、声をかけるだなんて到底無理。

「そうだよ」

メイはぼそつと呟く。

そう、三年前に終わってしまったことなんだから、このまま関わらなければいい。この披露宴が終わってしまえば、きつともう会うこともない。だからこれ以上、権理の存在にそわそわする必要

も、ない。

「うん。そうだよ」

もう一度呟いて、メイは鏡の中の自分に暗示をかけるようにしつかりとうなずいた。もう、權理のことは終わったこと。鏡に向かってそう呪文をかける。

「もう関係のない人」という、心を乱されないための呪文を。

メイが化粧室から出ると、新郎新婦がちょうど会場に入るところだった。

真つ暗な会場からワツと歓声があがり、ゆつくりと会場に進んでいく二人に眩しいスポットライトが当てられる。

真つ白なふわふわのウエディングドレスと、それを守るように寄り添う白いタキシード。その二つが並んで進んでいくのを、メイは目を細めて見つめた。祝福の声に包まれて進んでいく二人。何となくうらやましい気持ちを抱えながら見送るうちに、会場の扉が閉められてその背中は見えなくなった。

すぐに入っていけば目立ってしまうだろうと、少しだけ扉の外で待った後、メイは会場の扉を細く開けて中を窺う。

会場中の誰も、スポットライトを浴びた、幸せいっぱい二人に注目している。光に包まれた二人が会場の中心あたりへと進んだところで、メイは細く開いていた扉を押して会場に入る。こっそりと。

誰もが主役の二人に目を奪われて、メイが会場に入ってきたことに気がつかないようなタイミン

グを見計らったつもりだった。けれど、自分の席に急ごうとしたメイの手首を誰かが強く掴んで引き寄せた。

誰か知り合いかと軽い気持ちで振り返ったメイが見たのは……

不敵に微笑む、三年前に別れたきりの『モトカレ』。

その『モトカレ』こと權理は、メイの手首を掴んだまま、ぐいぐいと会場の隅っこに引っ張っていく。な、な、なんで、なんで權理が私の手を引っ張ってるの!? 何? なんで?

メイの思考は一瞬で恐慌状態に陥る。問い掛けようにもパニックのあまり、金魚のように口をパクパクさせるばかり。言葉も出てきやしない。

会場の角、つまり本当の隅っこ、しかも音響装置の陰まで連れてこられる。メイは思わず目を見開いて權理を見上げた。その表情には、美しいアクマを彷彿とさせるような、妖しげで、どこか余裕を感じさせる微笑が浮かんでいて。

「谷村、メイさん」

聞き覚えのある声。いや、聞き覚えなんて可愛らしいものじゃない。鼓膜に焼きついたままで、忘れることもできなかつた声。忘れたいと思っても、忘れることのできなかつた人の声。

その声が自分の名前を呼んでいる。

なんで!? なんで權理が!?

さっき既にパニックに陥ったメイの脳細胞は、さらに右往左往したあげく、ついにはストライキに入ったようにその活動を停止させた。

そしてようやくその口から出た言葉は……

「あの、どちら様……でしたっけ？」

混乱しきった思考は、全て忘れたふりをするので、この危機的状況を回避しようという浅はかな選択をしたようだった。メイの脳みその出す答えなんて、所詮こんなものだ。

メイの言葉を受けて、權理は目を見開き、それからぎゅっと眉根を寄せた。その厳しい瞳に射抜かれた途端、メイの心臓は飛び跳ね、そして凍りつく。

「あ、あの、すみませんが私、戻らないと……」

完全に赤の他人を演じたまま、メイはその場を逃げ出そうとする。

だって、權理の視線は針でも含んでいるかのように刺々しい。それが痛くって、恐ろしくて。一步、二歩、音響装置から延びるコードに足を取られながらも、メイは後ずさる。

けれど再び手首を掴まえられ、あつと思つた時には思い切り彼に引き寄せられていた。

權理が覆いかぶさってくる。何が起きているのか理解できないまま、唇に柔らかいものが押しつけられた。……權理の唇が。

逃げようとしてもすっかり後頭部と腰を抱えこまれ、逃げる事ができない。反射的に唇を真一文字に引き結んだものの、權理の舌先がなぞるようにそこを撫でまわしてくる。

「い……や、やめ」

声を出した瞬間、それを待っていたかのように彼の舌が口の中へ侵入してくる。

執拗にメイの舌先を追い回し、絡みつくように舐めて吸い上げる權理のキスに、メイは思わず「は

あ……」と艶っぽい吐息を漏らしてしまう。

誰もが新郎新婦に目を奪われ、今メイと權理が何をしているのか気付く者はいないだろう。それをいいことに、權理の手が薄いパーティードレスの上からメイの胸をぐっと掴んだ。

「んんっ!!」

メイは咄嗟に、力いっぱい權理の胸を突き飛ばしていた。それと同時に会場の照明が明るくなり、彼の顔がはつきりと見えた。ぎゅっと眉を寄せた顔が。

メイは呆然自失。頭の中は空っぽで。ただ、荒い呼吸を繰り返すばかり。

そんなメイに向かって權理は余裕たっぷりといった様子でにやりと笑う。そして自分の唇についた彼女の口紅を親指で乱暴に拭い、その指を舐めて見せた。

「思い出してもらえました？ 谷村メイさん」

答えることもできず、メイは背中を向けて逃げるようにその場を走り去る。

な、何!? 何でこんなことになつてるの!? 今私、キスされたんだよね? か、勘違いとかじゃ、ないよね? ねっ!?

何とか復旧した思考回路で、もはや誰に同意を求めたいのかもわからない質問をぐるぐるどめぐらせる。体中が心臓になつたように、脈が全身を駆けめぐって、頭痛さえするくらい。ぐらぐらと眩暈もする。

やっと辿り着いた自分の席で、行儀が悪いと思いつつぐったりとテーブルに突っ伏す。『何で? どうして?』。その言葉だけが、ひたすらメイの頭の中を行ったり来たりしていた。

だからメイは気がつかなかった。隣の席に絹がないことに。あまりにも帰りの遅いメイを心配して探しに行こうとした絹が、物陰に潜む二人の姿を見ていたことなんて……

ざわつく二次会会場でメイは困り切っていた。本当だったら、二次会なんかに来たくはなかったのに。

あれから、頭の中が権理のことですべてどうしていいのか分からなかった。だから今日はメイの家に泊まる予定の絹と二人、早々に帰宅してゆっくりお酒でも飲みたいと思っていたのだ。

けれど懐かしい面々に捕まってしまう。絹と二人、まるで同窓会のノリで半ば無理矢理こまで連れてこられてしまった。

ぼんやりとしていたメイは彼女らとの飲み会だと思っていた。しかし連れてこられた先は披露宴の二次会で、当然新郎側の友人もいる。まさかここまで来て「帰る」とも言えず、席に着いたものの思わぬ事態に陥っていた。

新郎の友人の店だというそのごちんまりとしたバーは、ある種の熱気に溢れ返っていた。恋人を見つめる場として、友人の結婚式を挙げる人が多いのもうなずける。一瞬、合コンか何かと間違っ
てしまいそうだ。

そして現在、そんな妙な納得をしたメイは、数人の積極的な男たちに囲まれてしまっている。

いつもだったら絹が「あんたたち!! アタシのメイに群がってんじゃないわよ!!」とか言いながら乱入するのだけれど、その絹が今夜は助けにこない。しかし男たちに囲まれてその相手をするこ
とよりも、絹が助けに入ってくない理由の方が今のメイにとっては大問題だった。
なぜなら当の絹。実はメイの背中合わせの席に座っている。……権理とテーブルを挟んで向かい合っ
て。

つい数分前、絹は権理に群がる女性陣を追っ払って、その席を奪い取ったのだ。

もしかして、絹ちゃん、権理のこと気に入っちゃったの!? なんて、考えは浮かばない。絹の好
みと、権理の外見はかけ離れすぎている。絹の好みは、がっしりとした大きな男の人はず。そう、
格闘技系の……だから、絹が権理を口説こうとしているなんて、考えられるはずもなく。

では、どうして群がる女性陣を追っ払ってまで、権理の前の席を奪い取ったのか、という疑問が
残るわけで……

まさか……権理とのことが、ばれたわけじゃないよね?

そう思うと、血の気が引いていく。彼のこと泣きついてしまった時の、あの絹の激昂ぶりが生々
しく思い出されて……

もちろん、三年前も今も権理の名前を教えてはいない。今日の披露宴でも、突然キスをされた時
以外に、メイは権理と会話どころか顔も合わせていないので疑われることはないはず。だからきつ
と大丈夫だと思う一方で、不安でたまらなくなる。

それなのに彼らはさつきからじっと押し黙ったまま、口を開かない。メイはそんな二人の様子が
気になって仕方ないのだ。

二人の向かい合っている席はメイの真後ろだから、二人がどんな表情をしているのかも分からない。それがより一層メイの緊張感を高めていた。

メイには、息を潜め、二人の会話に耳をすませることしかできない。ふと、背後から、

「はじめまして、ワタクシ大島絹っていいですよ。あなたは？」

「橘権理です」

そんな妙に芝居がかった、わざとらしい自己紹介が聞こえた。メイとしてはもう気が気じゃなくて、目の前の男たちが何を言っているのかなんて、全く耳に入っていない。

だって、実は絹、実家が有名空手道場で、彼女自身、空手の師範代なのだから。空手、といっても絹の流派は総合格闘技で使われる投げ技や打撃技も取り入れている、より実践的なものだ。女だといっても、長年稽古を重ねてきた絹は、実際に権理を血祭りに上げるくらい力は持っている。

ああ、何かあつたら……

メイは祈るように胸の前でぎゅっと手を握りしめる。三年前には浮気をし、そして再会した今日、突然唇を奪うなんてことをする、自分には理解しようもない『モトカレ』。

それでもメイは、何事も起こらないことを願ってしまう。そして、そんな自分をバカだと思ってしまう。

違うわ、だってそんなことをして、絹ちゃんに万が一のことがあつたら大変なもの!! コトが起こつて、絹ちゃんが犯罪者になつてしまつたら——

自分にそう言い聞かせながら、つい権理の身を案じてしまう自分自身の心をごまかした。そんなことを思っている間にも、メイの背後で権理と絹の会話は続く。

「あんた……さつきアタシのメイに何をしたの？」

「ああ、見てらしたんですか？」

絹が話の核心に入った瞬間、メイは一気に青ざめ、思わずグラスを落としそうになつてしまった。見られていたのだ、さつきの一件を。

さらに二人の会話は続く。

「見てらしたんですか、ですって……？ あんた、アタシの可愛いメイに……っ、ふざけんじゃねえ……てめえは……てめえはメイの何なんだ？」

怒りに震え、それでも周囲に気を配っているのか、絹は必死に声を押し殺している。顔は見えないけれど、夜叉のような顔をしているのは間違いない。絹のそんな問いかけに、権理はフンと鼻で笑う。

「モトカレですよ」

「も、モトカレ!？」

「アタシのメイ。……に、聞いたことはありませんか？ まあ、三年前の話ですけどね」

「三年前……？」

絹の声のトーンがさらに落ちる。メイはまずいと思った。けれど、どうしていいのか分からず、体は動いてくれない。

「そう、だったの。……お前は、あの時のバカか」
ダン!!!

その音に、考えるより先にメイは振り返っていた。

ピンヒールの片足をテーブルに載せた絹が、権理のワイシャツの襟を掴んでいる。ワインレッドのドレスから伸びる、スレンダーな脚は見事なものだが、今はそれに感心している場合ではない。一触即発の気配がびりびりと空気を震わせている。

周囲もしん、と静まり返って、何事かと権理と絹に注目している。

「ああ、皆さんどうぞお気になさらず。全く問題ありませんから」

襟首を掴まれているとは思えないくらいに、権理は鷹揚な声と笑顔を周囲に向ける。権理の言葉を信じたのか、それとも単に巻き込まれたくないと思ったのか、店内の誰もが目を逸らして我関せずの顔をし、軽く二人から遠ざかった。

そんな中、メイだけが真っ青な顔で二人を振り返ったまま動けずにいた。

「メイを……メイを泣かせたのはお前だったのか!!」

「泣いていた？ 泣いていたんですか？ メイが」

権理が驚いたような声をあげる。ふと、メイと権理の視線が絡んだかと思うと、彼はどこか嬉しそうな笑顔を浮かべた。メイの心臓が大きく鳴る。

……どうして、そんな力オするの？

浮かんだ言葉は当然声にはならない。代わりに言葉を発したのは絹。その声は怒りに震え、殺気

さえ含まれている。

「メイ、とかつて馴れ馴れしく口にするな。汚れる!! しかも何笑ってんの？ メイが泣いてたっ
てことがそんなに嬉しいの？ 今すぐその綺麗な顔を、二度と笑えないようにしてやろうか？」

絹は、掴んでいた権理の襟首をまるで釣り上げるかのようにさらに引っ張り上げる。

権理は余裕な表情を崩しはしなかったものの、「ぐっ」と小さな呻き声をあげる。メイはハッと
我に返った。

そう、今はとにかく暴走寸前の絹を止めなければ。でもどうやったら……

「まあ、落ち着いてください。あなたのメイさんが、真っ青になってこちらを見えますよ」

「ええ!？」

首がもげそうなほどの勢いで絹が振り返る。さつきからすぐ後ろで状況を窺っていたメイと視線
がばっちり重なって。

「……メイ!!」

自分の顔がどんなふうか、一気に青ざめた絹の顔を見れば、なんとなく想像もつく。きつと情け
ないほど困りきって、今にも泣き出しそうな表情をしているに違いない。

そんなメイを見て悔しそうに、絹は権理の襟首を離した。

高校時代、しつこくメイに付きまとった同級生がいた。絹はいつもメイを守ってくれていたもの
の、放課後、絹がちよっとトイレに行った際に、メイは見計らったように現れた同級生に乱暴に連
れていかれそうになり、それに抵抗しようとして階段を数段階み外し捻挫したことがあったのだ。

メイの姿が見えずに心配して探しまわっていた絹が、ちょうどその瞬間を目撃して……あつという間にその同級生を捕まえ……殴った。同級生の男子は口の端から血を流し、それを見たメイは驚き、さらには血の赤さに怯えて泣いてしまったのだ。

幸いその男子に大きな怪我はなく、放課後で誰も目撃していなかった上に、その男子もメイに怪我をさせた後ろめたさから、殴られた事実を誰にも言わなかった。そのため絹も処分されるようなことはなかった。

けれど、あの一件以来絹はメイの前では、間違っても誰かに血を流させるようなマネはしなくなった。

……血が出ないように、投げ飛ばすことはあつたけれども。

「橘権理っ、今日はメイに免じて何もしないであげるわ。本当なら、肋骨くらい折ってやりたかったけど」

さすがにこんな狭い店内で投げ飛ばすわけにもいかなかったのか、物騒なことを言い放つに留めた絹。けれど、メイにはその言葉が本気だと分かり、内心震えあがった。何事もなくて本当に良かった!! なんて。

「いい？ メイには近づかないで。近づいたら……二度と女の子とイイコトできなくしてやるから」再び権理の襟首を掴んで、絹が権理にそつと囁き、そして投げ捨てるようにその手を離れた。そしてくるりと向きを変えると、不安な気持ちを隠しきれないメイに向かって、いつものようににっ

こりと笑う。

「さあ、メイ。もう帰りましょ？ こんなところ、いる必要はないわ。みんなにだって、その気になればいつだって会えるんだもの。だから、帰ろ？」

「うん。絹ちゃん、そうしょ」

ほつとした気持ちで、メイは何度もうなずく。それがメイにとっても、絹にとっても、そして権理にとっても一番いいことのように思われた。

だから差し出された絹の手を掴んで、立ち上がるうと思つたのに。

これできつと危険な状況は脱した……そう思つたのに。

「絹さん？」

「何よ」

メイの手を掴もうとしていた絹の手が、権理の声にびたりと動きを止める。

「良かったら一緒に飲みませんか？ ……とことんね。帰ってしまうよりも面白いと思いますよっ」

絹と権理の間に、再びバチバチと火花が散る。

まずい、とメイは思う。絹はこの手の挑発に弱いのだ。できることなら、さつき絹が提案したように、すぐにでも帰りたいのに……

けれど、絹の目にはほのかな炎が揺らめいていて。

「あら、面白そうね。付き合つてあげてもいいわよ」

「き、絹ちゃん!!」

ぐいと絹のドレスの裾を引つ張るメイに、絹はウインクして見せる。

「あいつ、アタシを酔わせてメイに近づくつもりよ。そうはさせないわ。大丈夫、心配しないで。逆に腰も立たないくらい、がっちり潰してあげるから」

「心配するなっただって……」

そういう問題じゃない。そう言いたいのに、絹はもう椅子に座り直し、權理と向かい合っている。

「じゃ、乾杯でもしましょうか」

「ええ、喜んで」

「すみません、このお店で一番強いお酒をください」

權理が片手を上げ、セリフとは似つかわしくないほど爽やかな表情で、強いアルコールを注文する。ほどなくして、ウオッカのボトルと、それ専用の小さなグラスが二人の前に運ばれてきた。流れるような手つきで、權理がグラスにウオッカを注ぎ、絹の前にすつと差し出す。

胡散臭さ百二十%の笑顔をお互いに振りまく絹と權理は、その小さなグラスをちんとぶつけた。

メイにはその音が、試合開始のゴングに聞こえたのだった。

「メイちゃん、いい飲みっぷりだね!!」

メイと同席している男たちから、歓声が湧き起こる。そんな中、メイはたった今飲み干したカクテルグラスを、やや乱暴にテーブルの上に置いた。

「もう一杯、何か頼もうか?」

「……あ、お願いします」

もう既に呂律もまわらない。自分がそれほどお酒に強くないことくらい、メイだってよく分かっている。

それでもすぐそばで『モトカレ』と自称『保護者(殺気付き)』がお酒を酌み交わしているプレッシャーときたら……とても飲まずにはいられないのだ。

そしてふと二人の会話に注意を向ければ。

「あんたさあ、何考えてるのか分かんなくて気持ち悪いわっ」

「気持ち悪いとは聞き捨てならないですね。あなたも切れやす過ぎです。カルシウムが足りてないんじゃないですか?」

「ふん、アタシの美貌を維持するにはビタミン類の方が大事だわ」

「美貌……」

「てめえっ!! 今、笑いやがったな!!」

「ぐふっ!!」

ちらと振り返って様子を窺えば、テーブルを乗り越えた絹が權理の体を羽交い締めにし、ウオッカのボトルを口に押し込んでいる。

そしてしばしの攻防の未離れた二人は、引きつる笑みを浮かべながら、再びどちらともなくグラスを合わせる。そしてやはり口元を引きつらせながら、グラスの中の液体を呷った。

くらくと眩暈を感じながらも、メイにはそんな二人の間に割って入る勇気もない。だからといっ

て、完全に無視してられるほど、凶太くもない。

だとしたらやっぱり飲むしかないじゃないか。

「さ、メイちゃん。どうぞ」

目の前に新たなグラスが置かれる。ロンググラスの中には、綺麗な薄ピンク色の液体。ピーチ系のカクテルなのだろうか。グラスの底から、しゅわしゅわと炭酸の気泡が美味しそうに舞い上がっている。

迷わずメイはそれを手に取ると、また一気に呷った。もう、口にしたらそれが、何味なのか、何風味なのかも判別できない。体がふわふわとして、なんだかとても楽しくなってくる。

そんな頭でもう一度振り返ると、睨み合ってアルコールを無理矢理飲み下していたはずの二人が、微笑み合ってグラスを合わせているように見えてくるから不思議だ。おどろおどろしい気配さえ、今は草原の風のごとき爽やかさ。

なあんだ、二人、仲良しになったのね。良かった。

うふふ、と思わず頬が緩む。ほっとしたら、メイはまたしても喉が渇いてきてしまう。

「おっかわり〜」

空になったグラスを高々と掲げ、お代わりをねだる。アルコール、弱いくせに。

ぐらぐらのふわふわで、たのしー。

「私ちよっと、トイレに行つてきますっ」

しなくてもいい宣言をして、メイは席を立つ。ぐらぐらのふわふわで、油断すると本当に天井が回る。けれどアルコール過剰摂取中のメイには、それが楽しくてたまらない。

『しっかりと、自分!!』と、自分を律する自制心など、既にカクテルの泡のように弾け飛んでいる。メイは店内に一つしかない化粧室のドアを、鼻歌混じりに開けた。男女用にさえ分かれていないそこは、ドアを開けると洗面所に、もう一つ先のドアがトイレになっている。

後ろ手でボタンと洗面所のドアを閉めると、店内の騒音から切り離されて、ほんの少しだけメイも自分を取り戻す。アルコールのせいだけでなく、その場の雰囲気にも酔っていたようだ。

背後で絹と櫛理が一緒にいるのを、はらはらしながら気にかけていたせいもあるのだろう。

「なんか、疲れちゃったなあ」

そう呟いてメイは壁に寄り掛かって目を閉じた。すると余計に周囲がぐるぐると回り出したような感覚がして、かくんと膝の力が抜けてしまう。

「ひゃ……!!」

慣れない高いヒールが災いして、そのまま前につんのめって転びそうになる。このままでは膝を強打する!! そう思った時、抱きかかえられるようにして体が支えられた。

「大丈夫ですか?」

「……わ、あ、あの、ありがとうございます。……え?」

洗面所とはいえ、ここはトイレの一角。先に人が入っているのに、ズカズカ入ってきていいところではない。もし酔っぱらいが閉じこもったりしていたなら、入ってくるのもありだろうけれど。

確かにメイは酔っぱらいだ。けれど店の人に救出されるほど酔っているわけでもなく。ではなぜ人がいるのか。そう思い至るまでに二十秒。

普通は一人ずつ入る場所に二人入るのはあまりいい状況ではないんじゃないかと気がつくまでに、さらに二十秒。

そして、この支えてくれている殿方が、誰かっことに気がつくまで二十秒。合計たつぷり六十秒。

「な、なな、な、なんで!!　じゅ、順番。順番守ってください!!」

本日何度目かのパニックに陥り、訳も分からず道徳を説こうとするメイ。支えてくれている殿方から離れようとする彼女の耳に、くくつと低い笑い声が聞こえた。

「バカですわねえ。洗面所の鍵、開けっぱなしにしている方が悪いんでしょう?　それに、転ぶ寸前のところを助けたわけですから、お礼を言われてもいいくらいですよ?」

「お、お礼なら言っただけ!!」

どうでもいいところで反論するメイの耳元で、またしても楽しげにくくつと笑われる。その低い笑い声に、メイの全身は粟立った。

抱えるように支えられた体勢のまま、ぐらぐらする視界の焦点を必死に合わせる。視線の先にあるその顔は……

「か、權理」

その名前を口にした途端、さらに心拍数が跳ね上がる。視線が絡むと、權理がふつと意地悪く微

笑んだ。

「どうやら思い出していただけみたいですね。谷村メイさん」

一気に三年前の記憶がメイの中に溢れ出す。その声で、散々に攻め立てられたことを。どんどん意地悪くなつていく囁きに対し、涙まじりに懇願してしまったことも……

『メイ』

その声が、どれだけメイのカラダの中を熱くしていたのかも。

「い、いや。はな、して」

離れようと思うのに、メイがどれだけ体を振っても、權理はその腕から逃してはくれない。転びそうになったところを支えられたせいで、メイの体勢は不安定なまま。そんなつもりはないのに、權理に体を預けるような格好になっている。しかもアルコールのせいで体から力が抜けてしまって、抵抗らしい抵抗もできず。

抱きかかえるようにしてメイを支えている權理の手が、今は彼女のお尻から背中にかけてのラインを、羽毛のようなタッチでそっと撫で上げている。そのたびにメイのカラダには淡い電流が走り、それに堪えようとするとつすらと涙が浮かんでしまう。

つ、と背中の中を指を這わされ、メイは「ああ」と掠れた声をあげて背中をのけぞらせた。その瞬間に顎を掴まれ、意地悪く微笑んだ權理とまっすぐに見つめ合う形になった。

再び心臓がどくと脈打ち、メイは落ち着きなく視線をうろろると彷徨わせる。けれど、權理は強い力でメイをさらに引き寄せ、メイは彼と至近距離で見つめ合う羽目になってしまった。

眼鏡の奥の、どこか冷たそうな瞳でじつと見つめてくる。

「元は笑っているのに、その瞳は笑っているようには見えなくて、メイはほんの少し眉を寄せた。『どう、して、こんなことするの?』」

無理矢理顔を上げられて苦しい。それでもやっと絞り出した声に、権理はにっこりと笑って答えた。

「面白いからです。さ、俺はメイの質問に答えた。今度はメイが俺の質問に答えてくださいね」

「な、何?」

権理は眼鏡の奥で目を細める。その目はどこか怒っているようにも見えた。

「三年前、どうして俺の前から消えたんだ?」

わざとらしいほどに丁寧な口調は消え去り、まっすぐに見つめ返してきた彼にメイは戸惑った。

そんなこと聞かれるとは思っていなかったし、それを一番よく知っているのは権理のはず。そう、知らないだなんて言わせない。

そう思ったなら、メイの中に急激に怒りがこみ上げてくる。

「からかっているの!?!」

三年前、浮気をしたのは権理の方なのに、どうして今更こんなことを。

ただ、面白がってるんだ。きつとそう。私をからかかって楽しんでるんだ。あの時、私がどんな思いで権理の前から姿を消したのか知りもしないで……!!

それに気付いた途端、メイの怒りは急激に膨らんで爆発した。

「ふざけないで!!」

弾けてしまった怒りのままに、メイは手にしていたハンドバッグを振り上げて、権理に叩きつける。それは権理の左頬に鈍い音を立ててぶつかった。

メイは予想以上の重たい感触に、驚いて目を上げる。殴られた当の権理は、メイから離れ、顔を押しさえてうずくまっていた。

メイが手にしていたのは、パーティーバッグよりも大きめのハンドバッグ。今日はアップした髪の毛がうまく纏まらず、もしもほどけてしまっても困らないようにと、ワックスやらスプレーやらを持参していたのだ。

そんなものを詰め込んだバッグを勢い付けて振り下ろせば、それはそれでしっかりとした凶器になる。そう、権理が思わずうずくまるくらいには。

その際に逃げ出せばいいものを、メイはやりすぎたのかもしれないと急に不安になった。

「あ、あの。大丈夫?」

「……っ、てえ」

声をかけてもうずくまったらままの権理にさらに不安を煽られ、メイも傍らにうずくまり、その顔を覗き込んだ。

「あの、ごめんなさい。大丈夫?」

権理の肩にそっと手を掛けた時だった。

彼の手は畏にかかる獲物を待っていたかのように、一瞬でメイの細い手首を捕まえる。そしてぐいと引き寄せると、驚いて固まったままのメイの唇を奪い、その艶やかな唇を舌先でなぞった。

何が起こったのか、すぐには分からなかった。

唇を舐めまわす權理の舌先が、メイの唇を割ろうとした時にやっと、自分の状況を理解した。それと同時に、考えるよりも先に手が出ていた。

……正確には、握り拳が。

アルコールでへろへろなメイの一撃など、それほど威力はない。けれど拳が顔面にクリーンヒットしたのはそれなりの衝撃があったらしく、權理は顔をしかめてメイの手首を離した。

その際に、今度こそメイは彼のそばから飛び退くように離れた。びたりと壁に背をつけ、出口に向かってじりじりと後退する。背中を向けたが最後、再び捕まるに違いない。それを警戒して、じりじりと。

やっと出口のドアノブに手が触れた時、メイは心底ほつとして、權理に向かって口を開いた。

「……どうして俺の前から消えたか、ですって？ 自分のしたこと、忘れたの？ それとも、あんなことをしてもあなたの言うことを聞く、都合のいい女とでも思ってた？ ……バカにしないで」悔しさで唇が震える。

もう三年も前のことなのに、どうしてこんなに鮮やかなほどの悔しさが湧いてくるのか。もう終わったことだと思っていたのに。もう、過去のことだと思っていたのに……

それなのにぎりぎり胸を締め付けるこの苦しさは、一体なんだというのだろうか？ メイ自身、納得がいかない感情の渦。

だから、それもこれもアルコールで感情が昂ぶっているせいだと、自分を納得させる。

「バカに、しないで!!」

こんな激しい物言いをしてしまうのも、きっとアルコールのせいに決まっている。權理が驚いたように目を見開き、それからどこか悲しげに眉を寄せたように見えたのも、きっとアルコールのせいだ。だって、權理はきつと腹の中で大笑いしているに違いないんだから。じゃなかったら、三年も前に別れた彼女にこんなことをする意味が分からない。

どこか物哀しげな權理が気にかかったものの、メイは自分の中でそう結論付けて、勢いよく化粧室を飛び出す。勢いをつけて飛び出さなければ、振り返って、うっかり切ない表情の自分を晒してしまいそうで。

それだけはどうしても嫌だった。

「メイちゃん遅かったね。お化粧でも直していたの？」

ずっと隣で飲んでいた男が、新たなカクテルをメイに差し出す。メイはそのグラスを受け取ると、ぐいっと一気に喉に流し込んだ。

冷たい液体が一瞬で滑り落ち、それからじわじわと喉の奥が熱くなる。けれど、今はそれが心地いい。

「ホント、いい飲みっぷりだね。もう一杯頼もうか」

「はい、お願いします」

メイは指先で唇に付いた水滴を拭いながら、こくんとうなずく。途端に蘇る、さつきまでそこに

触れていた、自分のものではない唇の、温かくて柔らかな感触。

心臓がとくとくと高鳴って、唇に触れていた指先を握りしめる。からかわれているだけに決まっているのに、こんなにも囚われてしまう自分が情けない。

「はい、メイちゃん。どうぞ」

目の前にグラスを差し出される。メイはそれを受け取ると、反射的にぐいと呷った。さっきよりもアルコールの濃度が高いのか、途中で「けほっ」と小さくむせ込んでしまう。自分の中を満たすアルコールの香りが一層強くなった気がした。

明らかにアルコール濃度の高いそれを、それでもメイは流し込むしかなかった。

視界がどんなにぐらぐらしようが、まぶた瞼が重くて仕方なろうが。それでもこんな気持ちのままでもやもやしているよりは、何も考えられなくなってしまう方がよっぽどましな気がして。

グラスが空になったのを見計らって、隣の男がさらにアルコールの強いカクテルを頼んでいることなんて、メイには知りようもなかった。

「んああああー！！ もうっ、思い出せないっ」

どれだけ記憶を掘り起こそうとしても、結局は何も思い出せずに、メイは父親のベッドの上で頭を抱える。

ちゃんと覚えていることといったら……そう、化粧室で權理にキスされたところまで。その先は、もうほとんど分からなかった。それまでよりも強いお酒を飲んでいたような気がするだけで、その

他のことといえば、妙に生々しいあの夢しか思い出せないのだ。

『メイ……』

耳に残る囁き声は、權理のような気もするし、別人のような気もする。

あの時……披露宴会場で權理に腕を掴まれ、物陰に連れ込まれた時、確かにびつくりもしたし戸惑いもした。けれど、心のどこかで自分を覚えていてくれたんだと思うと嬉しかった。

なのに、混乱した口から出た言葉は「どちら様でしたっけ?」。あの時明るく「久しぶり」と答えられていたら、何かが変わっていたのだろうか?

「バカだな。今更考えたところで、何も変わらないじゃない」

そう呟いて膝を抱き、その間に顔を埋める。過ぎた時間は巻き戻せない。ろくに話もしないままだったし、これからもどこかで權理にばったり会うなんていう偶然はきつとないだろう。

そんなに頻繁に起こらないからこそ『偶然』というのだろうか。

そんなことを考えていると、心臓の辺りがぎゅつと痛むような気がして、メイはぶんぶん頭を振った。その途端に二日酔いが引き起こすひどい頭痛に見舞われ、涙で視界が潤む。

それがただの頭痛によるものなのか、それとも別のものなのか……あえてメイは考えないことにした。

「とにかく着替えなきゃ」

買ったばかりのパーティードレスは見事なまでにしくちゃで、メイは思わず苦笑いをした。

その時、下の階からかすかに携帯の着信音が聞こえてきて、痛む頭を片手で支えながら階段を降

りる。

着信音は玄関に放り投げられているハンドバッグの中から聞こえている。きつと酔っぱらって帰ってきてここに放り投げたんだな、と思いながら携帯を取り出し、通話ボタンを押した。

「もしもし?」

『メイ……!! ねえっ、メイっ!! あなた、大丈夫なの!?』

「ぎ、絹ちゃん……」

大音量で聞こえてきたのは、どこか湿った響きを帯びた絹の声で。確認するまでもなく、号泣しているに違いない。マスカラが溶けるのも気にせず、真っ黒い涙を流す絹の姿が思い浮かんで、メイはまた苦笑いする。

『よ、良かったっ。全然携帯にも出ないし、本当に心配したのよ!!』

うわーん、と派手な泣き声まで聞こえる始末。絹も大変だったのかもしれないが、二日酔いの朝に、携帯が壊れそうなほどの大声をぶつけられるメイも、たまったものではない。

「き、絹ちゃんったら。大袈裟なんだから。私は大丈夫だったよ。それより……ちよつと声のポリューム落してもらえないかな?」

『まさか』

メイの言葉をどう邪推したのか、絹の声は三トーンほど低くなる。それはもう、魔女のような声で。『誰かそばにいるの?』

けれど鈍感なメイはその変化に気がつかない。まだアルコールが抜け切っていないせいもあるの

だけ。だから、そんな絹の変化を全く気に留めることもなく話を続ける。

「ん? 誰もいないけど……どうして?」

携帯の向こう側から、ほうつと長いため息が聞こえた。付き合いの長い絹には、今の返事で十分なようだった。

『なんでもないわ。そう、一人なのね? 良かった。ちゃんと一人で帰れたのね』

「それがね、分からないの」

『分からない!? ちよつとそれ、どういうこと!?』

再び大きくなった絹の声に、メイは耳から携帯を離してしかめっ面する。

「うん。本当によく分からないの。気がついたらね、何をどうしたのか、お父さんのベッドで寝てんだ」

てへつと笑うと、再びため息が携帯越しに伝わってくる。けれどさっきのものとは種類が違う、完全に呆れモードで。

そして今度は、少し前の魔女のようなものではなく、どちらかというと、恨みがましい響きを帯びた声が聞こえ始めた。

『昨日、あれから橘権理に無理矢理飲まされてね。アタシ、気がついたら潰されちゃったの。か弱い女性が潰れるくらいにお酒を勧めるなんて、あの男、本当に恐ろしい奴だわ。ごめんね、メイ。アタシがちゃんとそばに付いているべきだったのに酔い潰れちゃって。でも良かった。何事もなくて』

「絹ちゃん……」

絹が權理に無理矢理飲まされた、という点はちよつと違うな、と思ったが、絹が本気で心配しているのは伝わってくる。

高校時代に出会った頃からずっと、絹はいつもメイを守るうと必死になってくれていた。確かにちよつと極端だとしても、それでも必死に……

『メイ?』

思い出に耽^{ふけ}つて黙りこくつたメイに、絹が声をかける。メイはハツとして、どつぷり浸^ひかっていた思い出から抜け出した。

『どうかした? 黙りこくつて、具合でも悪い?』

『ううん。ちよつと昔のこと思い出してただけ。絹ちゃんと会った頃のこと』

『そう。……あのね、メイ』

『なあに?』

『アタシはね、これからもずっと、メイのことを守っていくわ。だってアタシはメイのおかげで今こうしていられるんだもの』

『……絹ちゃん』

照れくさくてどうやって答えたらいいのか分からず、メイは鼻の頭を掻く。妙にしんみりした空気を振り払うように、絹がくすつと笑った。

『でも本当に安心したわ。私なんか、エリに引きずり起こされて往復ビンタよ。ひどい目に遭ったわ。まあ、エリが泊めてくれたから助かったけどね』

メイは、同じく高校からの友人で、昨日の二次会にも参加していた九条エリ子の顔を思い出した。きりりとした美人で、昔から他人には手厳しい。特に絹には。それはエリが絹には口で勝てなかつたからじゃないかと、メイは密^{ひそ}かに思っている。

『エリちゃん、昔から絹ちゃんに敵しいもんね』

『本当、ひどいっつら。このアタシを平手で殴れるのなんて、両親以外にはあの女しかいないわ。エリが男だつたらアタシ、言葉にするのもおぞましいくらいに、散々^{たふ}翳^なつて可愛がつてあげたいくらいよ』

そんな会話をしながら、メイは玄関の一角にキラんと光る何かを見つけた。玄関に下りて拾ったそれは、自宅の鍵^{かぎ}で。

ああ、酔^よっぱらつて落としたんだなと納得する。けれどふとその周りを見ると、昨日履^はいていたハイヒールが、酔^よっぱらいが脱^だいだとは到底思えないくらいに綺麗に揃^{そろ}えられていて。

『メイ、聞^きいてる?』

『え? え、と。うん』

何となく引^ひつかかるものがあって、慌^{あわ}てて居間に駆け込む。キッチンには水が入ったままのグラスが一つ。それは食器棚の高い位置にしまわれていて、背の低いメイは普段あまり使わないもので。『メイ、ちよつと、何かあったの?』

上の空で返事をするメイに不安になったのか、絹^{いづか}が訝^{いぶ}しげに問^といかける。

『あ、ごめんね。絹ちゃん』

『どうしたのよ』

「あのね」

鍵は玄関に落としているくせに、ハイヒールはきちんと揃えてあったこと。普段は使わないような位置のグラスをわざわざ取って、水を入れたまま飲んだ形跡もないこと……

「酔っぱらっていて、思いもよらないような変な行動するものなのね」

そう言っつてメイは、妙に納得した顔でうなづくのだった。

第二章 アブナイ生活

権理は助手席に座って、よく知った風景を眺めていた。天気が良くて風が心地いい。

その上、これからある『企画』^{「えんかく」}を実行しようとする権理は、すごぶるご機嫌だった。口元がにんまりと笑みを刻んでしまうくらい。

最初からそんなことを企んでいたわけではない。権理自身、こんなことになろうとは思ひもしなかったのだから。

そう、ちょうど一週間ほど前までは。

そして記憶は遡る。^{さかのぼ}あの夜……あの披露宴の夜に。

権理は、披露宴のパンフレットの席次表にその名を見つけ、薄い唇の端を持ち上げるようにして笑った。

その目に映った名は『谷村メイ』。

ちょうど会場の端と端。しかもお互いに背を向ける席にいるはずのメイを、権理はそつと振り返る。人ごみに紛れて、よく知った背中が見え隠れしている。ちらりちらり見えるその横顔は、三年前と同じようで、それでいて三年という時間を経た分、大人びた雰囲気^{まじ}を纏っていた。